

# 横浜、ルネサンス

Yokohama Renaissance



Number 7

特集

横浜を聴く

横浜を詠む

Who's Who in YOKOHAMA

横浜の定番

濱

Yokohama

横浜信用金庫

## ごあいさつ

横浜信用金庫 理事長 斎藤 寿臣

『横浜ルネサンス』第7号をお届けします。今年から本誌は春と秋の年2回発行することになりました。本号では横浜と音楽の関連をテーマとした「横浜を聴く」を特集しました。横浜らしくポップな感覚を意識した編集を目指しましたが、いかがでしょうか。

前号から始まった企画「横浜を詠む」には歌人の水原紫苑さんにご登場いただきました。また、新企画の「横浜の定番」では本牧の三溪園を取り上げています。

『横浜ルネサンス』第7号、お楽しみいただければ幸いです。

## 目次

横浜絵解き図鑑／チーズと横浜	2
目次／理事長挨拶	3
<b>特集 横浜を聴く</b>	
中村由利子 ピアニスト	4
長崎新吾 バイオリニスト	6
上不三雄 プロデューサー	8
中村裕介 ブルース・ミュージシャン	10
小山宏一 プロデューサー	12
長谷川篤司 NPO 法人「アーツシップ」代表	14
横浜を詠む／水原紫苑 <写真：森日出夫>	16
Who's Who in YOKOHAMA /ラジオ DJ 福原尚虎	18
横浜の定番／百年目の春夏秋冬を育む 三溪園(中区)を訪ねて	20
エコノミストから見た横浜／みずほ証券市場営業グループ 投資戦略部長 チーフストラテジスト 高田創	22
横浜ジェリービーンズ俱楽部通信	23



**現在**、チーズの国内消費の8割以上は海外からの輸入に依存している。そして、その半数以上が横浜港に上陸している。

2005年度(平成17)の日本のチーズ輸入額は810億3700万円(前年比7.1%増)で、輸入数量は21万1692トンにおよんだ。これは過去最高の記録。横浜税関が2006年2月に発表した港別輸入実績の内訳を見ると横浜港の輸入実績は、数量では全国の52.7%、金額では51.1%を占め、数量、金額ともに全国第1位となっている。

その背景には、横浜港がチーズの主要生産国を抱えるオセアニアや欧州との定期航路を抱えていることや、大手乳業メーカーの工場が神奈川県内に所在することがある。

**チーズ**は牛や山羊、羊などの乳に乳酸菌、酵素を加えて造られる「ナチュラルチーズ」と、そのナチュラルチーズを加熱・加工して保存性を高めた「プロセスチーズ」に大別される。

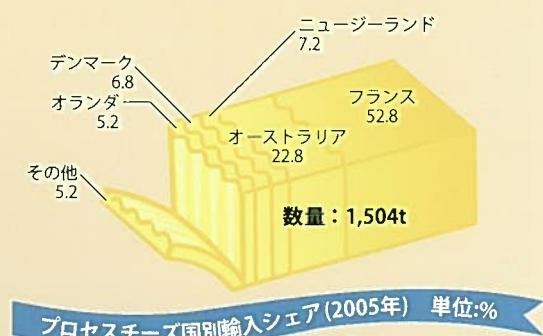
ナチュラルチーズは全国では29カ国、横浜港では23カ国から輸入している。全国、横浜港とともに輸入実績はオーストラリア、ニュージーランドの順。この2カ国で数量では約7割、金額では約6割のシェアを占めている。その要因としては、両国で生産されているナチュラルチーズはプロセスチーズの原料に適したハードタイプのものが多いこと。また、比較的価格が安く品質も安定していることなどがあげられる。

**一方**、プロセスチーズはナチュラルチーズと比較するとわずかな輸入量だが、全国では14カ国、横浜港では8カ国から輸入している。全国、横浜港とともにフランスが5割以上のシェアを占め第一位となっている。かつてはプロセスチーズの消費が大半だったが、食生活の多様化などから家庭における各種ナチュラルチーズの普及が進み、1990年度(平成2)以降はナチュラルチーズの消費量がプロセスチーズを上回り現在に至っている。

(横浜税関資料より作成)

## ◎横浜絵解き図鑑

## チーズと横浜



中村由利子

横浜を聴く

特集

# 今、国境を越えて 自由に活動できるのは、 横浜育ちだから



なかむらゆりこ

作曲家・ピアニスト。横浜生まれ。フェリス女子短期大学音楽科ビアノ科卒業後、1987年に「風の鏡」でCBSソニーよりデビュー。以後、ソロ・アルバムのほか、サウンド・トラックやCM音楽などで活躍し、近年は「冬のソナタ」「ごめん、愛してる」「春の日」「かわいいあなた」などの韓流ドラマなどにも楽曲を提供し、注目を浴びている。CDジャケットは「韓国が愛したピアノ - 中村由利子ベスト / Yuriko Nakamura Best」発売元：株式会社ユナイテッド・アジアエンターテイメント 2,800円（税込み）撮影協力：ヤマハリフラ・プラス（TEL03-3354-0020）

## 韓流ドラマを盛り上げるピアニスト

爆発的なヒットを連発し、日韓交流の大きな架け橋となつた韓流ドラマのブームはまだ記憶に新しい。胸が苦しくなるような甘くせつなく叙情的な韓国ドラマをさらに盛り上げるのに一役買つているのが、横浜出身の作曲家・ピアニスト中村由利子さんだ。きらきらと光る星くずのように、あるいは、高原を覆い尽くす霧の細かな水滴のように、繊細で優しく包容力に富んだ中村さんの調べは、国境を越えて韓国人の人々の心をもしっかりとつかんでいることは数字にも表れている。

中村さんは2000年にはじめて韓国を訪れ、現在までになんと13枚ものアルバムをリリースしている。04年には高視聴率を記録したドラマ『ごめん、愛してる』(KBS)や『春の日』(SBS)に挿入曲を提供。それをきっかけに、数えきれないほど韓国のドラマに挿入曲、主題曲を提供してきた。

しかし、韓国のビジネスの現場は中村さんの曲の調べのように繊細でゆつたりしているのではないらしい。

「韓国と日本ではビジネスの仕方が少し違うように感じました。韓国ではその場の“ノリ”だとか、情熱を大事にします。

## 横浜まれの横浜育ちの環境

国際都市、横浜で生まれ育つことは、世界各国で活躍する中村さんの活動の源になつていているようだ。

「幼い頃のアルバムを見ると、近所にいた韓国やドイツの赤ちゃんと一緒に写つていてたりします。画家だった父はそういつた方が困つていなかを気にするような人でした。その父が山下町の洋菓子店『かをり』のお菓子の包装紙をデザインしていたご縁で、『かをり』では学生の頃からピアノを弾くアルバイトをさせてもらっていました。今思うとフェリスで

石橋を叩いて叩いて準備する日本よりも、韓国はビジネスのスピードが速くて、ついていくのに必死でした。韓国ドラマでは、撮影したものを見た日に放送することもありますので、実際、私もドラマに“飛び入り出演”することができます（笑）。

そんな韓国ですが、食事を大事にする点は見習いたいですね。私たちは普段、いわゆる“口ケ弁”というものをいたたいていて、それはそれで美味しい食べているんですが、韓国ではご飯と汁物が必要な温かいことに感心しました。『ご飯食べた?』って挨拶代わりに言うんです。素敵ですよね」

## 学生時代にはロックバンドも

「学生時代はジェフ・ベックとか、スティーヴィー・ワンダーとかをカバーしてくれるロックバンドでキーボードを弾いていました。『ショットガン・エクスプレス』っていうバンドで、ヤマギワのコンクールで優勝したり、地元ではちょっと有名だったんですよ。その他にもセント・ジョンセフとかサンモールの学生とプログレやフュージョンを演奏するバンドを組んだり。いい思い出です」。

たくさんの思い出がつまつた横浜。どこに来ると「横浜に帰ってきたな」と感じますか?という質問には……

「横浜もすいぶん変わりましたよね。それでも中華街や山手に行くと『ああ、横浜に帰ってきたな』と思ひます。昨日までニューヨークに行つていたのですが、あちらの中華街を見て、やっぱり横浜を思い浮かべました」。

# 開港記念交響楽団で 新しい音楽の泉を!



良い音楽を安く提供したい

神奈川県内には現在29のオーケストラがあるが、プロとして活躍しているのは(財)神奈川フィルハーモニー管弦楽団唯一つだ。「現在約70名の正団員で演奏活動をしていますが、1972年の発足当時は25名程度でした」と眼を細めながら懐かしく語るのは、前身のロリエ管弦楽団から財団化まで創設期の産みの苦しみを体験された長崎新吾(62歳)さん。

72年に第1回演奏会を野毛の音楽堂で開催して以来、78年の財団化まで、実力のある演奏家集めや慣れない資金繰り、書類作りなどで大変だったという。

「良い音楽を安く聴いてもらいたい」という一律背反するテーマに取り組んだせもある。地元企業の資金応援だけでは足りず、団員は手弁当にならざるを得なかつた。

「でも、79年に県民ホールで開催したサマーバケーションコンサートは、横浜から音楽で世界一周の旅をする構成で楽しい音楽会でしたよ」。

このコンサートで一つの目標を果たした長崎氏は神奈川フィルを去ったが、これはその後神奈川フィルと市民をつなぐ大きなイベントとなつた。

音楽には人を変える力がある

長崎さんは昔、池袋のビアホールでおもしろい体験をしている。店で酔つてはよく暴れていたヤクザを鎮めようと、客席まで降りて演奏をすると、静かに演奏後には「貴方の音楽を聴いて自分の生き方が間違っていたことに気づいた」と足洗つて故郷に帰つたという。以来「音楽は人を良くもし、悪くもする」と信じている。「私は音楽のジャンルは問いません。歌謡曲にだって美しいメロディーは沢山あるし、ジャズ演奏者はリズムが素晴らしい。メロディー、ハーモニー、リズムがしっかりといるのが良い音楽です。この要素がしっかりとしない音楽、例えばシャカシャカした音楽だけを聴き続けるとシャカシャカした人間になってしまう」というのが信条だ。

中区山下町の「港の見える丘公園」に建つ「イギリス館」で90年から続いている「はあとあるコンサート」は、この「音楽の力」を育てなくてはいけないと始めた活動だ。この演奏会には、ステージと客席の区別がない。演奏者と聴衆が同じ空間を共有し、堅苦しくない雰囲気の中で音楽を聴いてもらうことを心がけている

からだ。

現在、この企画はティータイム

に妊婦とお腹の赤ちゃんに「音楽の力」を語りかけるマタニティコンサートへと発展している。

最近はテレビのCMを手がけるなど活動の幅は大きく広がっている。しかし、地元に密着した活動も忘れない。長く住む南区のコンサート委員会の副委員長としての活動もこなしている。「最近は区の予算が減つて演奏会が開けなくなつたのが残念。演奏者と聴き手が空間を共有する機会をたくさん持つことが、テクニック至上ではない音楽文化を育てるため有必要」と行政の支援を期待する。

横浜と音楽について質問すると、「愛知万博でオーケストラが時限的に組織されたように、開港150周年記念横浜オーケストラが組織されたら素晴らしい。西洋文化の発祥の地でもある横浜のオーケストラが、世界中に横浜をアピールしながら演奏して回り、日本で育った西洋音楽を海外に向けて発信できたら、この街の音楽文化は大きく育っていくよ」と熱い言葉が返ってきた。聴き手に何かを伝える「音楽の力」を信じながら、長崎氏のバイオリンが今日も横浜に響く。▼

プロデューサー  
上不三雄特集  
横浜を聴く

じょうふみつお  
「マシュマロ・レコード」主宰。1946年横浜生まれ。子安の大口通商店街にて「勉強堂洋服店」を営むかたわら、28年間ジャズ・レーベル「マシュマロレコード」の運営を続け、現在までに45枚のレコードをプロデュースし、ジャズ・ファンの熱い支持を集めている。

# 個性を求める時代 世界中で僕にしか作れないものを作る



## 小さな紳士服店から世界へ発信

横浜のごく普通の商店街の、ごく普通の紳士服店が世界とつながっている。子安の大口通商店街にある『勉強堂洋服店』の店主、上不三雄（60歳）さんが28年前、たったひとりではじめたレコード・レベル「マシュマロ・レコード」がそれ。年季の入った渋いジャズ通にとつては信頼と尊敬の代名詞とも言うべき存在だ。そのカタログにはチエット・ベイカー や デューク・ジョーダンなど、そうそうたる顔ぶれによるオリジナル・タイトルが並ぶ。

ジャズにのめり込んだきっかけは、野毛のジャズ喫茶「ちぐさ」。ここはかつて渡辺貞夫や穂吉敏子といった日本の名プロレーヤーたちが通いつめたことで知られるお店だ。

「中学2年の時にラジオでジャズを聴き始めました。そのうち学校をさぼって『ちぐさ』に通い始めて……。学校の音楽の先生が『ちぐさ』に来ていて、アルト・サックスのジャッキー・マクリーンのことを『マッキー・ジャクリーン』なんて言つていたのを覚えてます。彼女と一緒にいたようだから、カッコつけたかったんでしょうね。懐かしい思い出です」。

## ジャズファンの耳を豊かにするために

最初は自分が所蔵していた未発表音源のプレスから始めた。一枚のレコードを作る時に、一番楽しいのはミュージシャンとじっくり話し合つて、どんなレコードにするのか考える時。そして録音に立ち会う時。「大手レコード会社はどうしてもマーケティング先行になってしまいがちです。評論家だって批判的なことはなかなか書きにくい。でもそれではファンの耳は衰える。啓蒙なんて柄じゃないけど、一枚でも多く良質なレコードを作つて世に送り出すことで、社会のためになればと思ってやつています」。

そんな上不さんにとって営業は苦手だ。とはいえるレベル経営はれつきとした商売。売れなくてもいいというわけにはいかない。「赤字覚悟の向こう見ず」という姿勢はかつこいいし、尊いとは思います。ですが、それは僕のスタイルではないし、プロの仕事じやない。それぞれが自分の仕事を必死でやつて完成した作品を世に出すのであれば、せめてトントンまでにはしたい。また、たまには売れるレコードも欲しい。なぜならその資金で無名の、しかし素晴らしい才能を持った人を2、3枚紹介できるからです。世の中に

は売れなくても素晴らしい演奏家がいることを知っているからです。」

ジャズのマニアはもちろんだが、初めてジャズを聞くという人に気に入つてもらえるのが何よりもうれしい。だから、レコードを作つたらなるべくそのミュージシャンを日本に呼ぶようにしている。「CDの音と生の音ではやっぱり違うし、ミュージシャンとお客様をつなげて、それではじめて世に出したということだと思いますから」。

すでに高い評価を受けているマシュマロ・レコードだが、さらに羽ばたくのはこれから。「年金がもらえる年齢になりましたから、これからはレーベルに専念するつもりです。意欲と体力、それに経験ということでは、今が一番。ここからの10年はこれまでで一番充実するはず。自分で楽しめます。今は情報化のおかげで、大企業でなくとも、欲しい人に情報とモノを届ける仕組みがあります。そうなると求められるのはとにかく個性。世界中で僕にしか作れないものを作る。いまだにレコードを作るときは興奮して、頭をカッカさせながらやっています。そうして作ったものを一人でも多くの人に届けたい」。横浜発のレーベルは今、円熟の時を迎えようとしている。▼

横浜臭さにこだわればブルース

横浜の音楽と言えばジャズ、が定説だろう。確かに野毛→関内→中華街→石川町の狭い地域に数多くのジャズスポットがひしめき合い、地元や途中下車の爱好者が聴き入っている。こんなに多くのジャズスポットが地域に密集している街は世界中に類を見ない。確かにニューヨークには有名なジャズスポットが沢山あるが、その多くは地元の愛好家よりも観光客で賑わっているし、シカゴやニューオリンズも横浜の草の根ジャズの雰囲気とは違う。しかし、他のジャズ都市にはそれぞれの街の音があるのに、横浜にはそれが感じられない。そう思っていたら「横浜臭いといえば、やっぱりブルースでしょ」と、中村裕介さん（55歳）にあつさり言われて思わず膝を打ってしまった。

小学生の時に、母の経営する美容院で流れていたFEN（米軍極東放送・現※AFN）の音楽が原点ですよ。ジャズやポップスも聴いたしブルースやソウルも新鮮だった。横浜の中心から離れた金沢区町屋の美容院は、本牧の空気も横須賀からの風も感じられる環境だつたという。毎日聴く英語のリズムに惹かれた少年を、母親は英語に強い関東学院に進

学させてくれた。「そこの中学時代にギターに目覚めたかな。少し上の世代を見て、女の子にモテるにはギターだと思つたんだろうね（笑）」。当時は、ベンチャーやゴールデンカットスの全盛期。そんな大人の環境は遠い世界だったが、米兵のバンドに員数合わせで参加したのがこの道に入るきっかけだそうだ。以来横浜のおいのするブルージーなもの」を追いかけ続けている。

#### エディ藩に振られて誕生した市歌

横浜市歌は、ご存じだろうか？ 横浜で小学校に通つた方は必ず学校で歌つている。開港50周年記念に作られたもので、十代の浜っ子でもそんじている歌だ。6年ほど前のある日、中村さんは先輩のエディ藩氏（元ゴールデンカットス）から、「この歌をブルースにアレンジしてくれ」と言われた。エディ藩氏は、當時の中華街のトップからの依頼を、「日本人のおまえが作るべきだ」と振つたのである。曲はすぐにできた。が、「由緒ある市歌をブルースにして良いのか？」といふ思いもあつて2年ほどお蔵入りしていた。しかし、ある日ライブで演奏すると「この歌どこかで聴いたことがあるぞ……」と100年も前に森鷗外が作つ

た。以来ライブで演奏するうちに、中田市長が地元のラジオ局でこの『横浜市歌ブルース・ヴァージョン』を取り上げた。既成概念にとらわれない新しい風を横浜に吹き込もうとしていた若い市長には格好のプレゼントーションだったのだろう。あたかも新市長のテーマ曲のように街中着いた人は「さすが横浜、市歌がブルースなのだ」と思つてしまつ。

「でもエディ藩が作つて彼が歌つている、と勘違いしている人も少なくないんですよ」と中村氏。苦笑しながら、「この曲は、エディの作った『横浜ホンキー・トンク・ブルース』のネクスト・バージョンなんですよ。そう感じませんか？」。自ら横浜臭いブルースの継承者だと言い切つた。28歳でレコードデビューして以来、横浜とギターを看板に活動してきた。「ダイクママ」のコマーシャルソングやルパン三世のテーマ曲などアニメの作曲も数多いが、定期的に市内でのライブ活動も欠かさない。「もう一人のゴールデンカットスみたいにも言われるけど、横浜の音楽を継承していくたいんです」どこまでもブルージーな中村氏である。▼



ブルース・ミュージシャン  
中村裕介

特集  
横浜を聴く

なかむら ゆうすけ

横浜を砂浜を取り戻そうという市民運動のテーマ曲「浜には浜を」（山崎洋子作詞）で話題に。4月にはかつてゴールデンカットスが日本に紹介したブルージーな曲を集めたCD「Rough N' Jazz」(ROXVOX)が発売される。

問合せ先：ウォーターカラー・エンタープライズ  
TEL 045-786-4570 <http://www.angel.ne.jp/~water/>

地元横浜を中心、バンド仲間や友達を通じて、出演するミュージシャンやお客様をつかむ。ライブ終了後は、缶ビールを飲みながら明け方までミュージシャン達の話に耳を傾ける。それが新横浜のライブハウス『ベルズ』の名物経営者・小山宏一さん(47歳の日常だ。だから小山さんの睡眠時間は短い。一日平均3、4時間だ。「すき間時間に寝るのが上手ですか大丈夫」と快活に笑う小山さんを慕つて『ベルズ』には毎日若いミュージシャンがたくさん集まつてくる。小山さんがいつもミュージシャンとしての悩みを真剣に聴いてくれるからだ。

### ブッキングマンの腕を買われて

高校時代、小山さんはフォーカクバンドを結成していた。三人組。ベトナム反戦運動や、全共闘運動の余韻を残す70年代半ばだった。その頃、まだ横浜にはライブハウスもなく、自分たちの気持ちを現したいと思つたら公会堂を借りるしかなかつた。それにはお金がかかる。必要にかられて路上ライブを決行した。そしてチケットを売つた。横浜駅西口、関内駅前、伊勢佐木町など……。だがそれで生活できるわけではない。地味なバンド活動のかたわら、仲間を集め

めてデパートのイベントのブッキングをこなしてしのいだ。やがて、ブッキングのものが生活となつた。おりからのバンドブームの波に乗つて横浜にもライブハウスが生まれ、ブッキングの腕を買ってマネジャーとして採用されたのだ。そこからは「プリンセス・プリンセス」「マイカルシアター」、「足の草鞋だった。そこからは「プリンセス・プリンセス」「マイクロラブ」「聖飢魔II」「THE BOOM」「レッド・ウォーリアーズ」などが育つていった。

何年かして小山さんは、渋谷の「オングア・イースト」(現「O-EAST」)の立ち上げに加わつた。そこは500人を収容するライブハウス。東京でもかなり大きいライブハウスだ。運営していくために豊富な音楽人脈と観客が求めるものを見つけていた。小山さんはうつ

ないかと言わるのがいやだつた」こともある。「地元を相手にして、バンドの友達の友達というよう広げていく方が性に合つている」。それで、横浜に戻つた。そんな体験があるから小山さんの話には説得力がある。若い人は率直に耳を傾ける。「若い彼らは良いも悪いも言つてほしいんです。そういう意味で『ベルズ』は、人生のある時期を生き生きと過ごす人たちの学校であり道場なのです」。

そんな小山さんだが、ビジネスとして横浜を見る眼は冷静だ。「ジャズを除くと人口350万都市横浜には名古屋の10分の1くらいしかライブハウスがない。広島と比べても、人口は横浜の3分の1なのに横浜と同じくらいライブハウスがある。30分程度で東京に行けてしまうのでよ。だから『あ』にスケジュールが載るような箱(=ライブハウス)がない」。

それでも、小山さんは快活だ。「僕の与太話を聴いているとミュージシャンたちは『売れるかもしれない』という気になる。そうすると頑張つてお客様を呼ぶようになる。お客様がいなければ意味がないつづいてつも説得していますからね。その積み重ねがおもしろい」。小山さん自身が若い人と一緒になつて夢を追いかけているに違いない。▼



プロデューサー  
小山宏一

特集  
横浜を聴く

ごやまこういち

有限会社ダブルフューチャー代表取締役。新横浜にあるライブハウス「ベルズ」代表。1970年代半ば、当時では珍しい路上ライブの火付け役となつた。音楽ライブイベントの企画から横浜、東京のライブハウスのブッキングマンをこなす。横浜に根城を構え、ライブハウス「ベルズ」、レーベル会社「Red Shoes Records」を設立。現在は「N.U.」「マイクロニクル」「CHURU-CHUW」をはじめ、多くのインディーズアーティストをプロデュースする。

横浜らしい音楽とは？

横浜の人気DJ・福原尚虎さん（18頁）に言わせると横浜の音楽シーンの特徴は、ブルース、ロック、ポップス、ヒップホップと、様々なジャンルが「共存」している点だという。そしてこれは、異文化の玄関口であり続けた横浜という街の風土を表しているとも言えるという。つまり新しいものを常に受け入れてきた街ならではの特徴ではないかというわけだ。

だがそれは、裏を返せば横浜特有のがないと言っているようなものだ。今、横浜の音楽シーンを盛り立てようと活動する人はそこを意識して活動しているようだ。横浜のアマチュア音楽シーンを支えるNPO法人「アークシップ」代表、長谷川篤司さん（33歳）もその一人。

横浜特有の音楽というのは、実はまだないと大胆に言い切る長谷川さんが挙げる理由は明快だ。

「横浜は、東京に近すぎる。そして広すぎる」。つまり、東京のものはすぐに手が届く場所にいるし、地域色を追求するにしては、横浜は広すぎる。だから絞り込みができるないというわけだ。

そこに輪をかけて、横浜には収容人数が中規模クラスのライブハウス（中巴）

育つたミュージシャンが東京に向かってしまった原因になっていると言う。「東京には3～500人くらい収容する中巴がある。横浜にはこれがない。そのため、若いバンドで小巴を一杯で生きるくらいの実力と人気を獲得しても、結局そのタイミングで東京に行ってしまう」というわけだ。これではせっかく蓄積された横浜の音楽エネルギーも外部に流失し、独自性は生まれない。

問題は単純ではないが、長谷川さんはそれを音楽環境を盛り立てることでなんとかしようとしている。

Yokohama HOOD!!フェスティバルがそれ。今年5回目を迎えた同フェスティバルは、プロ志向もアマチュア志向も関係なく、同じ土俵で勝負するコンテスト。「なるべく多くのアーティストがステージに立てることに配慮し、世代別にグランプリの座を競い合った。こうした地道な努力が、目の肥えた音楽ファンを育て、やがては横浜独自の音楽シーンを形成するようになるのではないか」という発想だ。

音楽との関わり方は一つじゃない  
発想のきっかけは、アルバイトで勤め

ていない樂器店で出会った日曜バンドマンたちだった。

彼らは月曜日から金曜日まではごく普通のサラリーマンとして働き、週末「日曜バンドマン」に変身する。そんな一人の常連客に、ギターが足りない、バンドを手伝ってくれないかと頼まれた。参加してみると彼らは純粹に音楽を楽しんでいた。

「バンドをやっていると、音楽を続けたいという気持ちと、生活しなければいけないという現実が苦く交錯する。そんな中で、社会人バンドの人たちは実際にピュアに音楽を楽しんでいた。それを見ていて音楽との関わり方は一つじゃない、いろいろあって層が厚くなつた方が、結果的に街に音楽が溢れていいと思った」とがNPO設立のきっかけとなつた。

「横浜に独自の音楽シーンが生まれるためには、才能のあるシンガーや一人いれば済むというわけではない。イベント制作をやる人間も必要だし、CDを作るためにはカメラマンやデザイナーも必要。音楽の周辺にいろいろな人たちが集まつて、情報交換する場があつたらいなど思つて活動しています」。

裏方に回つた長谷川さんだが、その夢は果てしなく大きい。



## まだ見ぬ新しい創造に向けて「横浜音楽シーン」

NPO法人「アークシップ」代表  
**長谷川篤司**

特集  
**横浜を聴く**

はせがわあつし  
NPO法人「アークシップ」代表。1973年横浜生まれ。法政大学卒業後、樂器店で働くかたわら、バンド活動。神奈川県民部文化課との共催事業としてアマチュア・ミュージシャンのコンテストイベント「ストリートミュージシャンフェスティバル横浜」をかながわドームシアターで開催したことをきっかけに、「アークシップ」を2002年に立ち上げた。「Yokohama HOOD!!」「湘南藤沢まちかど音楽祭」「横浜音楽空間」といったイベントのプロデュースを手がける。

横浜、汽笛を歌へ

庭に聴く船出のひびき横浜に  
生まれてとほき異郷の神は

水原紫苑

写真 森日出夫



森日出夫（もりひでお）  
写真家。1947年横浜生まれ。JPS（日本写真家協会）所属。自ら撮り続けている横浜の港・町・人を「森の観測」と名づけ、写真集・個展に多数発表。ニューヨークADC賞、横浜文化賞奨励賞など多数受賞。

水原紫苑（みずはらしおん）  
歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春日井建に師事し、以降歌集『びあんか』『客人（まらうど）』『くわんおん（觀音）』『いろせ』『あかるたへ』、著作『世阿弥の墓』『星の肉体』『京都うた物語』などを発表。現代歌人協会賞、駿河梅花文学賞、河野愛子賞など多数受賞。

横浜港からかなり離れた私の家でも、庭に出ると、出航の汽笛が聞こえて来ることがある。  
この土地に生まれ育った身としては、そうして船が出て行くのを当たり前のように受けとめているが、考えればそれぞれの船は、私の見たこともない異郷にゆくかあるいは帰つてゆくのである。

汽笛と共に世界は広がつてゆくのに、その世界を知らない、たつたひとりの自分がいる。  
異郷には、こことはちがう神か、神々がおわすのだろう。船はおそらくその神か、神々に導かれてゆくのだ。港町の外に生きて、そんな広い世界とは無縁の自分が、少しさびしく、少し悲しい。

いつかこの港から船に乗つて、異郷の神に逢いにゆく日が来るであろうか。  
その日の汽笛を、誰か聴いてくれる人がいるだろうか。  
今私のように、たつたひとりで。▼

## 福原さんお薦めのアーティスト

### air code

ヨコハマ・ロックの最高峰。戸塚区で学生時代に結成、最高のロック・ライヴを見てくれる最高のバンド。インディーズながらその活動は全国区に及ぶ。「ヨコハマ・ロック」を掲げる彼らの存在は、文句なくヨコハマの「顔」。4月には自ら主宰するライヴイベント「yokohama ROCK EVOLUTION」で東京、千葉など関東圏を席巻する。<http://www.aircode.jp/>



### SEA EXPRESS

みなとみらい系恋愛ポップス。抜群のオーカルカと、女性ならではの恋愛をテーマとした楽曲でファン急増中。地元みなとみらいの景色の中で綴られた彼女達の音楽は、まさしく「みなとみらいサウンド」。今年7月2日、神奈川県民ホールでワンマン・コンサート決定。

<http://www.sea-express.com/index.html>



### 大久保有平

ヨコハマ孤高のシンガーソングライター。「良い曲はギター1本でも歌える」をモットーに、名曲作りを追求する。テレビ朝日系列「ストリートファイターズ」のイベントでも、会場ライヴ・グランプリに輝いた実力者。この春、渾身の自信作「once more...」をリリース、いよいよ勝負の年を迎える。<http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Stage/7745/>



### 参踏歌

都筑区の代表的Hip Hopクルー。地元都筑区を心から愛するヒップホップ・クルー。クラブ・シーンにとどまらず路上ライヴや学園祭などでも活躍、「都筑祭り」には連続出場。全国の人に自分達が住むヨコハマ「都筑区」を知ってほしい、という活動方針にテレビ番組も取材。そして、この春「横浜市長選挙」のテレビCMに大抜擢。<http://www.stk-production.com/>



当DJの実現へとつながった。夢を持ち、頑張っているインディーズ・アーティストたちと気持ちを通じて一緒にやれるのは福原かもしれない………という評価となつた。こうしてDJとしての白羽の矢が立ち、夢は実現した。

生活感のあるメッセージへのこだわり

福原さん個人の音楽の好みは60〜70年代のロックからヒップホップまでと幅広い。あえて共通項を拾うとするなら「その時代その時代で世の中を変えてきたものの、メッセージ性のあるもの」だという。メッセージへのこだわりを話す時の福原さんは熱い。「今は誰でも容易にCD

制作ができる時代。レコード会社との契約がなくてもネットで簡単に配信可能だ。インディーズだからこそ樂をせず、いい曲が出来たら次にもつといい曲をと努力すること。自分たちの生活の足下を見失わずに、伝える音樂メッセージを生み出すことが大事だ」。

もう一つのこだわりは、場の情報。

番組を支えるインディーズ・ファンが足を運ぶ場所は、ライブハウス。彼らは、わざわざチケットを買い、足を運び、そしてアーティストのメッセージと出会う。「番組の役割にはそんな場所と音樂とファンを結び付けていくこともある。僕は、言葉では伝わらない人間関係を感じ

る場としてのライブハウスの情報も伝えたい」。

福原さんは、インディーズ・アーティストにとって「横浜はチャンスと修練の場だ」という。FMヨコハマやtvkなどでインディーズ・アーティストを盛り上げようという気運が高まっているからだ。だがその一方で、修練の場としての横浜は人口の多い東京に比べて条件が不利だ。しかし、ハンディを背負いながらも人を集め、いいライブをする努力が全国区につながる。また、「僕のように地方から来た人への温かさを、横浜では感じる。だから夢を持つ人がスタートを切る場所として、横浜は最高なのです」。

横浜のインディーズ・ファンの朝は早い。毎週金曜の深夜午前3時、インディーズ・アーティストをネットで投票するコンテストプログラム「ヨコハマ・ミュージック・アワード♪」。ラジオからさわやかなアップビートの曲に乗ってDJ。福原尚虎さん(38歳)の元気な声が流れてくる。今日は誰を紹介するのだろうと期待する瞬間だ。今年で丸6年になるFMヨコハマの同番組は、何組ものメジャー・デビューアーティストを送り出した。だから福原さんの番組は横浜の熱心なインディーズ・ファンにとって、な

憧れのDJへの道を支えたガッツ。夢を抱いたまま上京したのは高校卒業後。放送専門学校に入つてアナウンサーの勉強をしながら、関内のオールディーズバーで5年間DJの修行をした。だが、憧れのラジオDJの世界とはほど遠く、された。だが、まだ憧れのDJではない。「このままでは終わらない、番組を持ちたい」という強い想いが5年間のレポーター生活を支えた。それは神奈川全市町村踏破という実績ともなつた。「あの頃、僕は人の何倍も頑張った」。

「頑張り屋福原」という評判は、番組担当者によると「アマチュアミュージシャンの路上ライブのような感じだった」という。それでも酔客の前で曲名を紹介しながら音楽をかけ、人の心に残るDJに努めた。そんな努力がFMヨコハマのプロデューサーの目にとまり、レボーターとして抜擢された。だが、まだ憧れのDJではない。「このままでは終わらない、番組を持ちたい」という強い想いが5年間のレポーター生活を支えた。それは神奈川全市町村踏破という実績ともなつた。「あの頃、僕は人の何倍も頑張った」。

ふくはらたかとら  
2000年から始まったFMヨコハマのインディーズ専門番組「YOKOHAMA MUSIC AWARD」を担当し、600組を超えるアーティストを紹介。そのうちメジャー・デビューしたアーティストはASIAN KUNG-FU GENERATIONほか25組を数える。現在はテレビ神奈川(tvk)にも「YOKOHAMA MUSIC EXPLORER」(土曜夜11:45~12:00)を持ち、ラジオ・TV両メディアによる「ヨコハマ音楽シーン確立」を目指している。

# 横浜にこだわる熱血DJは 人一倍の努力家

福原尚虎  
ラジオDJ



# 横浜の定番

市民に愛される横浜の定番を訪ね、  
今に伝わる技をお聞きします

## 第一回

### 百年目の春夏秋冬を育む

三溪園(中区)を訪ねて



川島さんに、原家が管理していた頃の作業着の  
“はっぴ”を着ていただいた。「これで松の枝切りの作業したら、格好良いだろうな」



三溪園を知らない浜っ子はいない。今年、明治39年の原三溪による自邸開放から百年目の春を迎える。園内17棟の古建築は貴重な文化財ばかりだが、その庭園に咲く樹々や花たちを楽しみに訪れる人も多い。

その数は減ったとはいえ桜の花のある風情は昔のまま。しかし、「桜の後の三溪園は、まさに百花繚乱。自然のままの様々な彩りを楽しめる美しい季節です」と案内してくれた広報

担当の吉川利一さんに、その庭園を維持管理するスタッフを紹介してもらつた。

川島武さん(24歳)は庭園管理を担当する8名のスタッフの最年少。造園土木を専門学校で学びこの仕事について6年目。三溪園は京都や奈良にある庭園とは違い、独特的の写実的表現を持つ近代的な庭園なので、その管理は三溪園独自のものが多く、

手本がない。すべて先輩たちに教えられての作業だ。たとえば、「昨年再生に成功した蓮の花も、一般的な原始蓮から三溪蓮に進化しているといつてもいいかも。それだけに花が咲いた時の喜びはひとしおです」と微笑む。開園当時正門の門柱に“遊覧御随意”的札が掲げられていた精神はいまも受け継がれ、「少しでも多くの人に来ていてただくこと」が川島さんの一番の喜びである。▼



固い蓮の種の殻を一個一個開き、開花させるのは手作業。

**【三溪園】**  
横浜市中区本牧三之谷 58-1  
電話：045-621-0634  
開園時間：9時～17時(入園は16時30分まで)  
休園日：12月29～31日  
入園料：一般(中学生以上)500円、  
こども(小学生)200円  
交通：JR根岸駅、横浜駅、桜木町駅より市バス。駐車場有り。  
<http://www.sankeien.or.jp/>

**【花ごよみ】**  
フジ 4月下旬～5月上旬  
ツツジ 4月下旬～5月中旬  
シャガ 4月中旬～5月中旬  
ウノハナ、キショウブ 5月上旬～5月下旬  
サツキ 5月中旬～6月中旬  
スイレン 5月下旬～8月上旬  
ハナショウブ 5月下旬～6月中旬  
ハス 7月上旬～8月中旬

## 三溪園ジェリービーンズ・コンサート

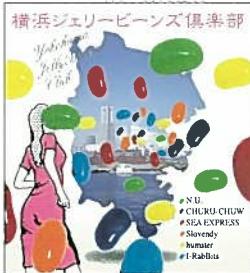
横浜信用金庫では、2005年2月4日(土)みなどみらい線開通2周年を記念した、「横浜高速鉄道の記念イベントの一環として馬車道駅において「ジエリービーンズコンサート」を開催しました。本コンサートは、横浜高速鉄道に対し、みなどみらい線開通2周年の記念イベントとして提案し実現したものです。なお、出演バンドの「N・U・」は、みなとみらい線沿線をテーマとした歌が多く手がけている横浜の男性二人組ユニットで、当日、みなどみらい線としては初めての「一日駅長」を務めました。

## みなとみらい線開通2周年記念コンサート



12月3日「三溪園ジェリービーンズ・コンサート」横浜本牧・デベンズ・コンサート、横浜本牧・デベンズマン」を開催しました。同コンサートは横浜信用金庫・横浜ジェリービーンズ倶楽部が企画したもので、横浜観光プロモーションフォーラム認定事業の「横浜ジェリービーンズコンサート」を実施しました。(財)横浜観光コンベンションビューローでは、同コンサートを「ハマ発あきあ」との最後のイベントとして位置付けていました。この企画は三溪園の外苑にある

## 横浜のイメージソングを収録したオリジナルCDを6月発売



横浜信用金庫(横浜ジェリービーンズ倶楽部)では、横浜のイメージソングを収録したオリジナルCDを作成中で、この販売収益を横浜市の「よこはま協働の森基金」に寄付します。当金庫が直接販売するわけではなく、CDを有限会社ダブルフューチャーに寄贈し、同社が販売を担当します。CDに収録する曲は全6曲で、N.U.など横浜で活動する6つのバンドが新たに書き下ろすものです。発売は6月上旬の予定で、6月3日(土)には開港記念会館に6バンドを集めて、第12回ジェリービーンズコンサートを開催します。

## 横浜ルネサンス No.7

2006年5月10日発行

発行 横浜信用金庫  
〒231-8466 横浜市中区尾上町2-16-1  
Tel.045-651-1451(代) Fax.045-651-2303  
<http://www.yokoshin.co.jp>  
編集 横浜信用金庫総合企画部  
<横浜ジェリービーンズ倶楽部>  
<http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html>  
E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp  
制作・デザイン PortSide Station Co., Ltd. + Basis Inc.  
©横浜信用金庫 Printed in Japan 本誌記事の無断転載・複写を禁じます  
本誌に関するお問い合わせは、横浜信用金庫総合企画部:045-651-1451(代)まで



# エコノミストから見た横浜

## 高田創

みずほ証券市場営業グループ 投資戦略部長  
チーフストラテジスト

筆者は昭和33年、横浜に生まれ30年近く磯子で育つた浜っ子である。昨年、昭和33年の東京を舞台にしてヒットした映画「ALWAYS 三丁目の夕日」の影響もあり、昭和30年代は隠れたブームにあるという。30年代ブームの背景には過去への郷愁と新たな時代へ向けた希望という両面への共感があるようだ。また、それは、90年代のバブル崩壊以降、人生の円熟期の15年間をバブル崩壊で失った40歳代・50歳代を中心とした世代の複雑な思いが込められているのかかもしれない。

筆者が30年代の横浜を幼心に想いだすセピア色のイメージは、まだ根岸線ができる前に磯子の海岸で泳ぐ児童の写真、根岸線が開通したのを喜んで友人と見にいったこと、米国映画を見る如く本牧に広大にあつた米軍住宅とその繁栄の姿、横浜駅東口の通路でみた傷痍軍人の姿、闇市から発したという磯子の「浜マーケット」のぼの暗さ、「三溪園」からみた東京湾の絶景、伊勢佐木町の「不二家」で食べたパフェの味、そして元町の独特な輝き等である。

その後、東京は昭和39年の東京オリンピックを期に「も

はや戦後ではない」状況を突っ走って様々な開発が

行われたが横浜は昭和30年代を引きずつた面も大きかつたのではないか。それは、横浜市中心部の米軍接収が長引いたなかでのインフラ整備が遅れたことにもよる。

一方、その半面、横浜に米軍という窓口からみた海外

の風が吹く街の匂いを残した。その後、大学・社会人と

東京での生活を中心にながらも50年近く横浜を見てきた実感として昭和30年代の横浜は最も輝いていたよう

も見える。その後、30年代的色彩を残して新たな輝き、

昨年、2005年は戦後60年、「還暦」を迎える多くの人々

が意識したのは戦後に生まれ育った人々の心の出发

点は昭和30年代だったのではないかということだ。戦後

横浜を襲い、なんとなく活力が低下したような面を感じられた。一方、90年代以降のバブル崩壊という「第二の敗

戦」から、世の中はいまや「もはやバブル崩壊後ではない」

状況を迎えるに至ってきた。

## 「第一

の敗戦」を引きずつて輝いた横浜は、今度「第二の敗戦」の後はどこに行くのだろうか。横浜に抱くイメージは、東京と一緒に時代の先端を目指して変わりながらもなんとなく変わりきれない面をもつ、昭和30年代を垣間見るような、一面で懐かしさを残し、また帰ってきてみたい街に思える。それは、Jeilly Beansのように海外からきたおしゃれな味を漂わせつつも、甘酸っぱい、そして思い出深さになつているよ

## 「第二

の敗戦」の後はどこに行くのだろうか。横浜に抱くイメージは、東京と一緒に時代の先端を目指して変わりながらもなんとなく変わりきれない面をもつ、昭和30年代を垣間見るような、一面で懐かしさを残し、また帰ってきてみたい街に思える。それは、Jeilly Beansのように海外からきたおしゃれな味を漂わせつつも、甘酸っぱい、そして思い出深さになつているよ



横浜の観光・コンペティションに携わる約180の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。

# 横浜ジェリービーンズ倶楽部



横浜ジェリービーンズ倶楽部は、

横浜のマーケティングを実践する横浜信用金庫の組織です。

当倶楽部の活動は横浜観光プロモーションフォーラムの認定事業になっています。

◎ 横浜信用金庫

<http://www.yokoshin.co.jp>

